



後山山荘

既存の部材を用いた施工



瓦葺きの屋根部分の上層、現状の土間床、梁、床、土間に既存の部材をジャッキアップしてベームの調整を行った。その後、柱木の調整を行い、軒先を揃えていった。古い部材に新しい部材の継ぎ目や接合部は丁寧に着色をせず、時間をかけて馴染ませていくようにした。

Landscape workshop

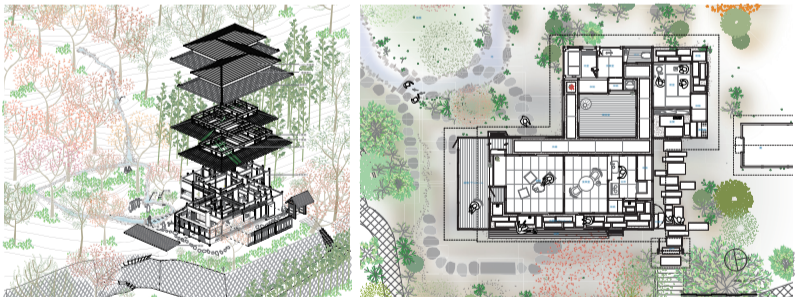


庭の中に多くの部材が埋め込まれていた。設計段階で、部材に長軸とした。既存の階段の高さは1100mmの高。建具もわざわざ選んで統一し、当時のスケールを維持していった。

持続可能な建築の在り方



庭の中心を軸として、新たな空間に引き込まれた。木や草花の大きさは既存のついでにつくられた。建物の表情は遠くからでも分かるように、軒先の深さを保ち、実際の光の当て具合に設計を行った。



新港が一望できる山手に昔日の面影を微かに残しながらも、朽ち果てている100年近く前に建てられた住宅が近年明らかになった。大正時代に建てられたであろう主屋の過半は原型を留めておらず、残存する部分も著しく脆い状態であった。しかし熱環境を踏まえた装階風の二段屋根や小屋裏換気窓、細部に渡る木部の丁寧な技巧、そして何よりも京都の大山崎に現存する「聴竹居」を彷彿とさせるサンルームからは設計した建築家の想いをうかがうことができる。これは建築環境工学の先駆者である藤井厚二によるものであり、故郷の福山市に唯一現存する藤井厚二の実兄の別邸であった。このプロジェクトは、既存の形態や状態を踏み取りながら、コンバージョンさせていくものである。具体的には、当初あったであろう形態を瓦葺下に埋もれていた敷石から導き、大屋根と二段屋根のプロポーションを踏襲する。

そして、藤井厚二の思考を新たに解釈しながら、内外のつながりや熱環境を考慮した内蔵地/サンルームなどの構成を考えた。また、残存していたサンルームはオリジナルの状態に修復しながらも床の壁面を跳上階子にすることによって居間との空気の流動をつくり緑側としても機能させている。新たな材質の部位に関しては着色を施さず、長い時間をかけながら古材と暖やかに同化していき上げる仕上げとした。さらなる100年の中で時間の変化に合せながら手を入れていき、その痕跡がこの建築の歴史となる意図している。



藤井厚二が設計した時点では、縁側/サンルームが快適な室内空間をつくりだすよう意図されていたが、今回のコンバージョンでは、藤井の縁側/サンルームの緩衝空間を住宅に取り巻くように内蔵地/サンルームを計画している。そのため、縁側建具の閉け閉めにより、内部環境を調整し、機械的な設備を多用せず生活をする事ができる。夏は建具を開け放すことで、風が抜け涼しく過ごせ、冬は内蔵地や広縁側との障子を開け閉めすることで、住宅を取り巻くパフファが空気層となり、暖かい室内となる。



作品名：後山山荘  
 設計者：前田圭介  
 原設計：藤井厚二  
 施工者：大和建設  
 所在地：広島県福山市朝の浦  
 構造：木造軸組構造  
 階数：平屋  
 延床面積：139.53㎡  
 竣工年月：2013年9月

